コミュニケーション演習４Ｄレポート

今から私はどう生きるか

02E064　山　田　佳　苗

はじめに

2005年１月のある日、昼近くに起きて無意識にテレビをつけるとNHKで歌を詠んでいる厳かな光景が映し出された。すぐにチャンネルを替えてしまったがこれといった番組もなく、またNHKに戻すことにした。別段、歌に興味がある訳ではなかったが何故か気になった。詠われる歌の意味も分からないし第一、何を言っているのかさえ分からない。だが一方で心地いい感覚、時間の経過が決して悪い意味ではなく、ことに長い感覚を覚えた。意識して他のチャンネルと比較して見てもそれは明らかだった。ふと、「私たちは何をそんなに急いでいるのだろう」と考えた。

世界はどんどん変化しようと突き進んでいる。“多文化”化、システム化、西洋化、合理化、マクドナルド化、グローバル化、一体化…挙げればきりがないほど目まぐるしく、この瞬間にも何かが変化しているに違いない。世界だけでなく日本も今、“改革”という言葉が声高々と叫ばれる。戦後の高度経済成長から始まって、私たち日本人の生活は180度変化した。私は変化することが絶対的に悪いことだとは思わない、むしろいつまで経っても変化しないほうがどうかと考える方である。世界が、日本が今よりももっと住み易く、人間が人間らしく生きていけることを望むのは人間として当然であり必然である。しかし、変化に対する願望の大きさと比例して増大するこの空虚感・違和感は何なのだろう。

私はゼミを通し、様々な世界の変化をみてきて「今から私はどう生きるか」というひとつの大きな壁にぶつかった。現代はただ自分のことだけ考えて生きていけばいい時代ではない。「自分さえ良ければいい」的な風潮が強い現代だからこそ、正面から生き方と向き合わなければならないのである。何故なら(極端に聞こえるかも知れないが)国を必要とする世界は終わったからである。今までは国に守られ、時に国を“盾”にして私たちは生きることができた。だがもう、国としての「国」―すなわち「境界」としての「国」概念を今の世界に当てはめることは難しい。環境問題も既に地球規模の問題であるし、９・11同時多発テロは今も地球全体を揺るがし続けている。「自分さえ良ければいい」は国に対する甘えであると私は思う。私たち人間はそれを“自由主義”と履き違えてしまった。

こう言うと、私があたかも「国の概念を捨てろ」と言っているように聞こえるかも知れないが、断じて違うということをわかって欲しい。私が言いたいことはむしろその逆である。それと同時に、国に守られるのではなく、私たち自身で国を守らなくてはいけないということだ。ここで重要なことは私の意味する「国」の概念は当然、今までと同じではないということなのである。

このレポートが読者にとって「自分の生き方」というものを見つめる“点”になってくれれ

ばと願う。そしてこの小さな出発点の重要性を、人間一人ひとりが持つ“普遍的な感覚”で分かり合えるものと信じたい。

現代日本は二分している？

50歳から上の年代はことに「昔は良かった」「今の若者は…」と言って嘆いている。若者たちはそれに応えるように新しい世界に突き進んでいく。そう、「昔の時代は終わったのだ」と言って。

日本はすべてを失った戦後からたった60年ばかりで、最前を走るアメリカやヨーロッパの技術を吸収しながら……いや、既に“IT革命”“グローバリゼーション”などを叫んで先進国と並んで走り、技術を吸収される国—これが今の日本である。特に自動車や電気機械の技術は世界に一目置かれる存在である。しかしそこに本来の「日本」そのもの、すなわち自らの「アイデンティティ」を盛り込んでいたか、と言えば素直に首をタテに振ることはできない。私は日本がこの間に「日本人」を置いてきてしまったのではないかと思うのである。

例えば、福沢諭吉は『通俗国権論』(1878年)で明治時代の日本を「心酔者流」と次のように言い表した。「一も西洋、二も西洋とて、ただ一方に進みてとどまることを知らざるその有様は船に帆をあげて錨の用意なきがごとく」。

要するに“西洋かぶれ”であり、アメリカやヨーロッパ社会を無条件でどんどん受け入れ、日本がことごとく劣った国であるという観念を自ら植え付けてしまったのである。「新しいもの(アメリカやヨーロッパ)が最善で、古いもの(日本)が最悪」という風潮は現代日本にもまったく当てはまるとは言えないだろうか。

付け加えて近代の科学技術の発達がこれに拍車をかけた。パソコンは合理主義の賜物だ。「速い」「遅い」「出来る」「出来ない」それだけが重要視される。「日本人」を置いてきた日本、とりわけ若者たちに浸透するのは当然と言えるかも知れない。一方で昔の日本を知っている年配者たちは新しいものを嫌悪する。対決は平行線をたどったまま「日本人」という感覚は霧の中に遠のいていく。若者たちは単に「心酔者」なのだろうか、それとも意図的に「日本人」をやめたいというのだろうか。

心の中の“日本人”を覚醒させろ　1

とはいえ、例えば『千と千尋の神隠し』がベネチア国際映画祭で金獅子賞を取った時、『キル・ビル』を観た時、一昨年、『ラスト・サムライ』という映画をアメリカ人監督が作って公開された時、日本人は日本が世界に認められたという喜びと共に、妙な違和感も少なからず持ったはずだ。最近私は『キル・ビル』を観たが正直、ユマ・サーマンやルーシー・リュウの日本語のセリフを聴いて笑ってしまった。

例えばこんなシーンを想像して欲しい。雪がしんしんと降っているなか、裸で露天風呂につかりながら、時に湯船にお銚子をのせたおぼんを浮かべてちびちび飲む。これを想像できない日本人はいない。それもただ想像するのではなく、「心地良さ」が無意識にプラスされて同時に想像されるはずだ。私は先に日本は「日本人」を置いてきたのではないかと言った。しかしどうやらそうではないようである。どんなに日本が豊かになっても、どんなに便利な社会になっても若者たちが荒んでいくのは「日本人」を置いてきたわけではないし、新しいものに心から突き進んでいるわけでもない。「日本人」としての基盤があるにも関わらず、現実がアメリカ化

に突き進んでいくギャップ、すなわち“アイデンティティ・クライシス”に陥ってしまっているからではないだろうか。

「はい」か「いいえ」のみ要求される現実と、年配者に「日本人」の心を要求される現実。

今から少し前に『GO』(行定勲監督)という在日韓国人を主人公にした映画が公開され、若者たちに影響を与えた。今年も『パッチギ！』(井筒和幸監督)という同類の映画が公開された。日本の若者たちは、自分たちが自国にいながら自国のアイデンティティを失ってしまっていることと、在日と呼ばれる人々を重ね合わせているのかも知れない。

心の中の“日本人”を覚醒させろ 2

「文化」とは辞書で引くと、①生活内容が高まること②人間が精神の働きによってつくりだしたものだという(『パーソナル現代国語辞典』学習研究社)。つまり、生活は「文化」であり、「文化」が生活。表裏一体であるものを無理に剥がし、別のものに貼り直しても必ず境目ができてしまう。剥がされた面にも大体、剥がした傷ができる。日本の「文化」はまさにこんな状態であると思う。もっと踏み込んで言うならば戦後、表を剥がされてしまった日本の「文化」にアメリカの「文化」を貼り直した状態。表裏一体とは表と裏の境目が溶け合い、融合して初めて言える。どんなにアメリカの「文化」が素晴らしく、社会に合理的なものであってもアメリカという「国」の根底から培われたからこそのアメリカの「文化」だ。つまり、いくら日本に浸透してもアメリカの「文化」はアメリカでしか正常に作用しない。しかし、まったく逆に考えてみよう。アメリカの「文化」が入ってきてどんどん生活が変わり、若者がアイデンティティ・クライシスに陥るのはそれだけ日本の「文化」が根底に息づいているということではないか。

今の日本人の欠点は、社会のアメリカ化が表に貼りつけてあるがためにアメリカの目で見ている点だ。私自身もアメリカの目で見ているから日本が二分しているように見えるのかも知れない。つまり、表裏一体だということを間違って受け止めている。だから裏から滲み出した日本の「文化」が古いものであると捉えてしまうのではないだろうか。表ばかりから見てもそれは見たことにはならない。

日本の「文化」が日本の問題を解決する糸口と言えない？

私は高校3年の時、たった2週間ばかりではあるがアメリカに行ったことがある。短期留学として日本人10人ほどでカリフォルニアへ行き、一軒に一人ずつホームステイする形で、午前は一箇所に集まって英語の勉強、午後は各ホストファミリーとの時間を過ごした。素晴らしい貴重な思い出だが、言うまでもなくカルチャー・ショックを受ける体験となった。

ある日、一日中市内観光する日があり、当日の朝、ホストファミリーに「今夜は私の友達と遊園地に行こうね」と言われて見送られた。夕方疲れて帰ってきた私は、当然、遊園地などに行く余裕はなかった。しかし、そんな私を見て気持ちを汲んでくれるだろうと思ったのが甘かった。そんなことはお構いなしに遊園地に連れて行かれ、夜中の12時近くまで付き合わされてくたくたになった。また、ある日にはホストマザーと買い物に出かけて市場に立ち寄り、「カナエは何が食べたい？」と聞かれた。突然であったし、まだ家に来てから2、3日目で日本人の礼儀とすればいろいろ相手のことを考えてしまい、自分の食べたいものを素直に口に出すことはしないだろう。私が言葉を濁していると、ホストマザーが「食べたいものがここには無い

の？」と別のスーパーに行くようなことを言い出して慌ててしまったこともある。とにかく今、私がどうなのか、どう思っているのか、聞かれた問いに対する“答え”を口に出さなければいけないことは「文化」として頭では理解したものの、感覚としては帰るまで慣れることができなかった。

アメリカは非常に沢山の民族が集まって生活を送っている。それぞれが異なった文化背景を当然持っているが、それぞれが自分の特殊文化を頑固に強行していてはアメリカでの生活は成り立たない。だから自然と「“おしゃべり”の文化」にならざるを得ないのである。さらに言えばこれは生活の知恵であり、道徳にも繋がっている。しかし、これを日本で実行したならば非常識であり、反道徳である。何故か。これこそ表(＝アメリカ)と裏(＝日本)の境目になっているからである。私はこの境目が日本の問題を複雑化させている一因だと思う。例としては、臓器移植問題や会社の実力主義への移行はまさにこれに直結している。単純に考えてもすぐ分かるのではないだろうか。日本人家庭で喧嘩が起きて、そこへ見ず知らずのアメリカ人が入ってきて解決しようとするのは、まず不可能なことだ。

アメリカの「文化」がいいか悪いかは私たちの視点で判断を下せることではない。しかし安易にプラスの視点のみ、または一視点のみで「文化」を考えるのはあまりにも危険だ。

そして視野が広がっていく

“灯台下暗し”。つまり、身近なことは遠くにいるよりかえって分かりにくい。であるならば身近なことに目を向ければいいだけのことである。日本が今、しなければいけないことは日本を見つめる作業である。グローバルな世界を創るなら尚更、必要なことだ。グローバルになるということは自分たちの「文化」を捨てればいいといった簡単なものではない。いかにいろんな文化背景を持った人間が共存していくかが鍵である。それにはまず自分の「文化」が優れているか劣っているかではない客観的な視野を持つことが必要になってくるだろう。日本を見つめる作業はその準備運動だと考えればいい。アメリカ化が進んだ日本を議論しても、正直進んでしまったものを今更後悔しても仕方がない。だからこそ、表からだけでなく裏からも見てみれば、自然と考え方も変化すると私は思う。

今、その視点で動き出しているのがスローフードだ。スローフードは必ずしも昔に戻ろうとするだけの運動ではない。「昔に戻ろう」という考え方で捉えていては「自分さえ良ければいい」の考え方と何ひとつ変わらない。「自国文化を裏からも見る」ことの実践がスローフードの出発点であり、自分の足元にあるものを見る・聴く・嗅ぐ・味わう・感じるという行為である。足元にあるものこそが私たちの「文化」であると気付くことがすべての出発点に違いない。それから客観的視野が初めて広がっていくという、この「文化」に対する向き合い方が私たちには必要なのである。

終わりに

冒頭の「何をそんなに急いでいるのだろう」という感覚。

これはアメリカに対する批判だろうか。それとも私たち日本人としての心の悲鳴だろうか。この感覚が“アイデンティティ・クライシス”の正体なのだろうか。この空虚感・違和感をこれ以上増大させない為に、私は一体どう生きていけばいいのだろう。

「日本人として21世紀を生きるための知恵」—それは「日本人」として生きることである。

まったく答えになっていないだろうか？いや、これこそ本当の答えである。何故なら知恵はそれぞれの生活から生まれていくものだからだ。しかし、日本の「文化」に、日本という「国」に固執することを意味しているのではない。「足元を大事にする」ということだ。これは非常に微妙で、繊細で、もしかするとどんなことよりも難しいかも知れない。何故なら、多くの人々の心を支配しつつある消費社会、物質社会という日常とまず向き合わなければ、最も近い「足元」さえ見えてこないからだ。

「人間の如き、無知無力見る影もなき蛆虫同様」(『福翁百話』)という福沢諭吉の言葉が最近の「天声人語」に載っていた(『朝日新聞』2005年１月11日)。所詮人間は戯れでしかなく、万事をあまり重く見ない方がいい。その方が思いつめて極端に走ることもないだろう。しかし、本来戯れと知りながら戯れをまじめに勤めるべきだ。それが人間の人間たるゆえんだと、福沢は語っている。社会の変化を“時代の流れ”として、当然の如く生きていくスタイルに疑問を持った福沢諭吉。今の日本を見て、彼は鼻で笑っているだろうか。それとも頭を抱えて想い悩んでくれているだろうか。

同じ記事にもうひとつ、今年の新成人に「あなたの“時価”はいくら？」と尋ねたら「ゼロ」と答えた人が最も多かったが、一方で「無限大」と答えた人も結構多かったという話が載っていた。新成人がどれだけこの福沢の言葉を知っているかはわからない。しかし、私は福沢さんに胸を張って言いたい。

「日本の将来もなかなか捨てたもんじゃないでしょ？」と。

今から私はどう生きるか。

国境が無くなりつつある世界、アメリカ化する世界をすべてマイナスで考えることはもうやめよう。所詮、人間は人間でしかない。でも、日本の「文化」をもう一度覚醒させてみない？視野を広げていくことはそれからでも遅くはないし、できないはずはない。

新成人の言葉を借りれば、人間は「無限大」であるはずだからだ。

参考文献

河合隼雄『日本人の心』2001年、潮出版社。
橋本治『ああでもなくこうでもなく３「日本が変わってゆく」の論』2002年、マドラ出版。
亀井俊介『アメリカ文化と日本』2000年、岩波書店。

(レポート指導教員　中村義実)